

## 搾乳ロボットによる省力管理技術と生産性

搾乳ロボットを用いることで、搾乳に係る1日当たりの労働時間は1/2に減少し、その内容も軽労化が図られた。また、産乳量は乳成分を維持しながら1.1%増加した。



写真1 搾乳風景

以下の成績は、搾乳牛60頭規模対応の搾乳ロボットに搾乳牛20~25頭を用いて得た。  
なお、比較対照のパラー搾乳も同頭数の搾乳牛を用いた。

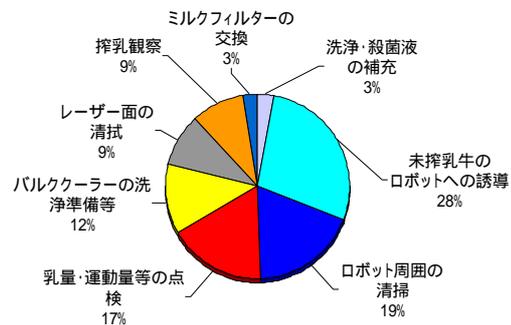
牛の搾乳ロボットへの十分な馴致を行うことで、牛は自発的にロボットを訪問して、搾乳行動を示す。このことにより、搾乳に係る1日当たりの労働時間は1/2となり大幅に減少する。

また、作業内容も、長時間ロボットを訪れない牛のロボットへの誘導、ロボットとその周囲の清掃、パソコンを用いた牛の管理データの点検など軽労化が図られる。

図1 労働時間(分)



図2 主な作業内容



牛は1日あたり約3回自分の意志でロボットを訪れ、搾乳行動を示す。従来の1日あたり2回の定時搾乳と比較し約1回搾乳回数が増えることにより、産乳量が約1.1%増加する。なお、乳成分は維持される。



写真2 レーザーセンシングによるティートカップ装着

図3 産乳量(kg) 11%増

